

神のやま

第10号



播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会

<表紙写真> 令和7年度造り物「えべっさん」

三ツ山大祭からわかる

城下町姫路の誕生

播磨学研究所所長 小栗栖 健治

はじめに 姫山の城

播磨国総社・射楯兵主神社から西北に、世界文化遺産に登録されている国宝姫路城を大きく望むことができます。姫路城の天守は姫山、西の丸は鷺山に展開しています。

姫山に初めて築城したのは誰であったのか、それを特定するのは難しいことです。織田信長の命を受け、天正八年（一五八〇）に播磨を平定した羽柴秀吉の姫路城の築城について、『豊鑑』は、「天守とかやとて、家を組上げて高くそひやかし」と記述しています。天守を具えた城の築城の最初は、羽柴秀吉でした。その後、徳川方と豊臣方が覇権を競った慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦は東軍が勝利し、池田輝政が城主として姫路城に入りました。輝政は秀吉の姫路城を解体し、新たに縄張を行いました。この縄張は、姫路の将来を見据えた都市計画でした。

輝政は姫山の山麓に展開する国府寺村、宿村、福中村、中村の四つの村を城地として縄張を完成させました。輝政の時代まで、姫山の山麓に中世以来の村が存在していたことは、秀吉の姫路城には城下町が整備されていなかったことを示しています。

一 城下町と中世の村

資料1に示していますが、山麓の村は東から国府寺村、宿村、

福中村があり、福中村の北に中村がありました。新しい都市計画によって、四つの村の住人はふるさとの村を捨て、移転することになりました。では、城地となったこれらの村々は、江戸時代、どのように変容を遂げていたのでしょうか。

①国府寺村

国府寺村は外堀の東と西に村がありました。西側は城内に取り込まれ、城下町の一部となりました。国府寺町が、その遺称です。外堀の東側（国府寺東部）は村として存続しました。三ツ山大祭と関係を持っていたのは西部でした。府寺村は町人地、武家地、寺町となりました。

②宿村

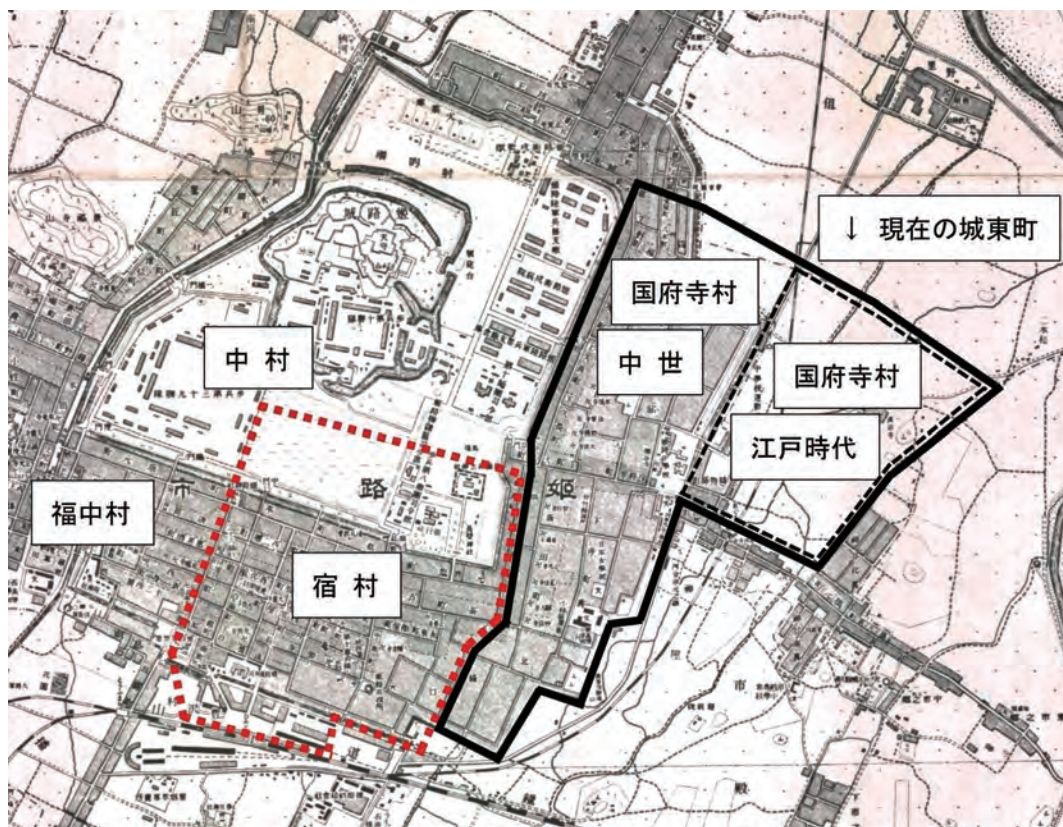
宿村のほとんどは城内となり、飾磨津御門の南側に僅かな田畑が残りました。「姫路領分図」（姫路市立城郭研究室蔵）には「宿村田地、村これ無し」と記述されています。宿村という村名は残りましたが、基本的に人家はなく、村としての機能を失いました。宿村は、町人地になりました。

③福中村

福中村の東部は城内に取り込まれました。福中町はその遺称です。村の中心部が城内となり、備前御門の西側に田畑が残りました。「姫路領分図」には「福中村田地、村これ無し」と記述されています。福中村という村名は残りましたが、基本的に人家はなく、村としての機能を失いました。福中村は、町人地になりました。

④中村

中村の東部は城内に取り込まれました。村の中心部が城下となり、船場川の西側に田畑が残りました。「姫路領分図」には「中村田地、村これ無し」と記述されています。中村という村名は



資料1 姫山山麓に展開した中世の四つの村（姫路市及其附近 明治34年3月30日発行 第十師団司令部）

残りしましたが、基本的に人家はなく、村としての機能を失いました。中村は、高禄の家臣の屋敷地・大名町となりました。

このように、国府寺村は外堀の東側に村は残りしましたが、宿村、福中村、中村には民家はなく、村としての機能を失っていました。城下町の建設は、姫山の山麓に展開した農村を都市へと変貌させることになりました。そして、商人や職人が住む町人町（まち）は大名町の南、中堀と外堀の間に設けられるのですが、その場所は現在の姫路駅前の繁華街へと発展していきます。

二 三ツ山大祭と「山付の者」

江戸時代、三ツ山大祭（江戸時代は、臨時大祭礼と称された）は晴天七日の日程で行われ、二色山は国府寺村、五色山は宿村、小袖山は福中村によって支配されていました。最終日に行われる「神式（じんしき）」は、現在の中の日大祭にあたります。この日、五種神事や謡囃子があり、三つの山に設けられたそれぞれの舞台では能（猿楽）が奉納されていました。

嘉永七年（一八五四）『臨時大祭礼見聞録』（姫路市立琴丘高等学校蔵）によれば、「臨時御祭礼に罷り出で候家筋の者」、また、「山付の者」と呼ばれる人たちが担当していました（以下、「山付の者」。この「山付の者」は、三つの山を支配する国府寺村、宿村、福中村と結びついていました）。

江戸時代、国府寺村（西部）、宿村、福中村には、基本的に人家はありませんでしたが、これらの村はそれぞれに「山」を持ち、支配していました。その実態を『臨時大祭礼見聞録』によって示してみたいと思います。

資料2 三ツ山大祭の風流の構成（嘉永7年：1854）

時代性	風流	担当する村
鎌倉時代	五種神事	国府寺村、宿村、福中村
室町時代	三ツ山	国府寺村、宿村、福中村
室町時代	猿楽（能）	国府寺村、宿村、福中村
室町時代	謡囃子	国府寺村、宿村、福中村
江戸時代	造り物	姫路町
江戸時代	曳き物	姫路町
江戸時代	俄	姫路町

①東の山付の者（二色山 国府寺村支配）

二色山は国府寺村の支配。「山付の者」は本町の国府寺次郎左衛門と国府寺村の庄屋上村次郎兵衛を筆頭に二十三人によって構成され、その内の五人が「休株」。「東の山付の者」は、かつての国府寺村（西部）に成立した町に居住しています。

②中の山付の者（五色山 宿村支配）

五色山は宿村の支配。全体は三十人によって構成され、その内の十人が「休株」。「中の山付の者」は、かつての宿村に成立した町に二割程度が居住しています。残る八割は北条、三宅、南条、上野田、城下町の南から西方向の村へ移転しています。

③西の山付の者（小袖山 福中村支配）

小袖山は福中村の支配。全体は十三人によって構成されています。「西の山付の者」は、二割程度がかつての福中村に成立した町に二割程度が居住しています。残る八割は中村、山野井、南八代、伊伝居、福中など城下町の西側に移転しています。

「山付の者」は、それぞれ国府寺村・宿村・福中村に属しているのですが、住居は城下町や周辺の村々に点在していました。「山付の者」は国府寺村・宿村・福中村が城下町になることによって他所へ移転した住人、つまり、中世にそれぞれの村に住んでいた住人の

末裔でありました。村を離れ、他所へ移転した後においても播磨国総社と強い関係を持ち、三ツ山大祭をはじめとする神事祭祀には、中世以来の自分たちの名譽として「山付の者」という仲間を結成したと考えられることです。

国府寺村・宿村・福中村は、大永二年（一五二二）の三ツ山大祭に際して、播磨国守護赤松晴政から山の造営を命じられていました。また、播磨国総社の祭祀は国府寺氏を惣頭人とし、この三か村は神事頭村に位置づけられていることからすると、国府周辺の村々を代表していました。

三 城下町に受け継がれる伝統

「山付の者」の存在によって、三ツ山大祭が中世の住人の末裔によって受け継がれていたことが明らかになってきました。解体された中世の村と江戸時代に建設された城下町、中世以来の伝統は受け継がれていたのでしょうか。

まず、三ツ山大祭の三つの山の配置について検討を加えてみたいと思います。三つの山は東から二色山・五色山・小袖山と呼ばれ、二色山は国府寺村、五色山は宿村、小袖山は福中村によって支配されていました（資料3）。この三つの山の配置は、姫山の山麓に展開した中世の村の位置と一致しています。この配置は意図的に行われている、そのように思えることです。

次に三ツ山大祭の神賑わいについて、検討を加えてみたいと思います。幕末の嘉永七年（一八五四）に行われた三ツ山大祭の神賑わいの行事（『臨時大祭礼見聞録』）は、資料2に示しているように、五種神事、三ツ山、猿楽（能）、謡囃子、造り物、曳き物、俄によって構成されていました。

が、三つの山と猿楽（能）です。三ツ山大祭に山が登場するのは大永元年（一五二二）のことですが、それと同じ時期に猿楽（能）が行われるようになります。それぞれの山に属した謡囃子の登場はやはり十六世紀の頃と推測されますので、ここまでは、池田輝政が城下町を建設するよりも前の時代のことになります。

池田輝政の姫路城が完成して以降の神賑わいは、**資料2**に示している曳き物、俄、そして、町屋を飾った造り物が登場するようになります。これらは城下町姫路が経済的に発展して以降のこと、おそらく十九世紀の頃と考えられます。

このように、三ツ山大祭の神賑わい行事は、ある特定の時期に



資料3 三ツ山大祭の「やま」の配置

これらの行事の中で、最も古い時代的要素になるのが「五種神事」です。競馬・弓鉾指・一つ物・神子渡・流鏑馬、この五種類の祭礼芸能は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて都・都市で人気を博していました。そうした芸能が都から地方へもたらされ、播磨国総社の祭礼に取り入れられたものでした。

その次に古い要素

全てが登場したのではなく、鎌倉時代から江戸時代の終わりの頃まで、長い時間をかけて創造されました。そして、これらの中で、三つの山の支配、五種神事、山とその舞台で奉納される猿楽（能）、これらは国府寺村、宿村、福中村の住人、中世の村の系譜をひく「山付の者」によって独占されていました。つまり、三ツ山大祭は中世の村の住人の末裔によって、村を解体された江戸時代以降においても、中世以来の伝統を受け継いで行われていました。

おわりにー旧住人と新住人ー

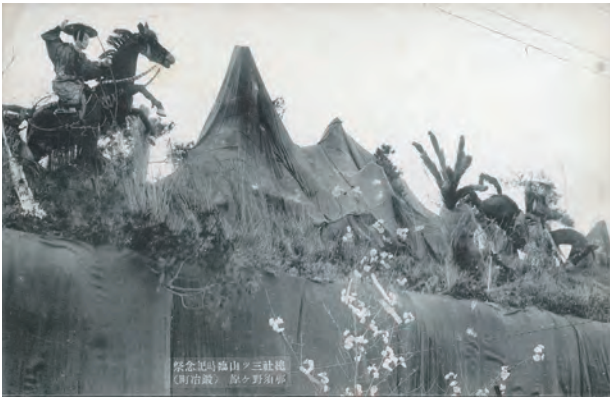
池田輝政による築城は、姫山と山麓に展開した農村は城下町・都市となり、姫路に大きな変化をもたらしました。

自分たちの村を失った中世の村の住人は、新しく建設された城下町に居住する者、また、周辺の村へ転出することになりました。新たに建設された城下町の最初の住人は、中世の村人であったことは想像に難くありません。中世以来の村の住人を「旧住人」、他所から新たに城下町に移り住んだ住人を「新住人」と位置づけることができるようです。この関係をもとに、三ツ山大祭の神賑わいに着目すると、中世以来の郷村の祭礼は「旧住人」が担当し、華やかな造り物や俄など都市祭礼としての賑わいは「新住人」が担当していました。江戸時代にみられる三ツ山大祭の賑わいは、「旧住人」と「新住人」のコラボレーションにより作り出されていました。

播磨国総社に受け継がれてきた三ツ山大祭には、城下町姫路の始まりの物語が内包されていました。姫路の歴史を宿す三ツ山大祭、地域の宝物であることがより鮮明になってきたのではないのでしょうか。

絵葉書でみる三ツ山大祭(大正2年)

播磨学研究所保管



鍛冶町 那須野ヶ原



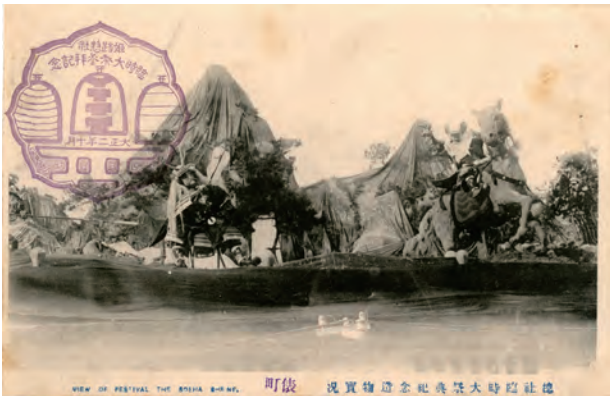
総社正面



東二階町 栗津ヶ原合戦



龍野町二丁目 曾我大磯



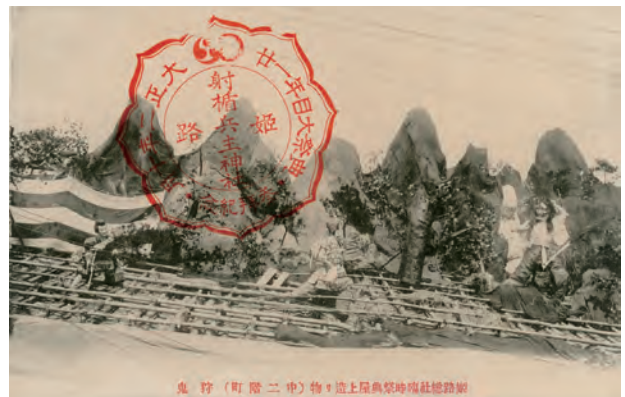
倭町 川中島の合戦



西二階町 村上義光錦旗取戻



中二階町 紅葉狩



中二階町 鬼狩



茶町 清盛睨潮



光源寺前 義士両国橋



平野町 曾我夜討



元塩町 名和長年 船上山



直養町 俊寛島流



豎町 日吉丸初陣



駅前通り光景



西魚町・恵美酒町 養老龍

令和七年度 保存会活動報告

令和七年度役員会並びに

特別講演会「三ツ山大祭からわかる城下町姫路の誕生」

(令和七年七月二十三日)

令和七年度の役員会を、播磨国総社 総社会館にて開催しました。役員会は、役員二十五名の出席、三十一名の委任状により開会しました。

開会に際して田中会長より、三ツ山大祭を八年後の令和十五年に控え、令和の三ツ山という新しい時代に則した祭りを目指し

て、ものづくりに励んできました。本年は七福神の中でも特に人気のある「えべっさん」をつくり、総社の宝恵駕籠行列に合わせ、謡囃子の充実を図りたいと頑張っています。

八年後の三ツ山大祭を目指して、皆様とともに元気に歩んでいきたいと意欲を述べられました。

引き続き、姫路市議会議長石堂大輔様（当会顧問）のメッセージをご披露させて頂きました。

続いて議案の審議に入りました。

示によるものと説明がなされました。

また、総事業費の十五%が自己負担となるとともに、つくりものの材料費が自己負担となることから、記念事業積立金を一部取り崩し雑収入として受け入れる旨の説明がなされ、一同異議無く承認されました。

そして、午後三時からは特別講演会を開催しました。

講師に、播磨学研究所 所長 小栗栖健治氏をお迎えし、「三ツ山大祭からわかる城下町姫路の誕生」の講演をいただきました。



第一号議案令和六年度事業報告、第二号議案令和六年度収支決算書（案）が説明され、一同異議無く承認されました。

続いて、第三号議案令和七年度事業計画（案）、第四号議案令和七年度収支予算書（案）について説明がなされました。

令和七年度予算につきましては、補助金申請額に対し大幅な減額となりました。宇那木オブザーバーより、文化庁への令和七年度の補助金採択件数が増加するとともに、補助対象内容の変更、補助金額の修正指

つくりもの製作会

(令和七年九月三日～九月十九日)



本年は「えべっさん」のつくりものの製作に挑戦しました。九月の三週間で十回の製作会を実施しました。製作にあたり、えかき・ものづくり作家のドウノヨシノブ氏に、つくりものの設計・ご指導をいただきました。

今回は製作するものは、えべっさんの顔・腕・胴体・鯛・台車・小物です。それぞれパーツをわけて製作を進めていきました。

顔は、マネキンに紙粘土を貼り付け、ふっくらとした頬、耳、もちろんえびす顔になるように丁寧に作っていました。また腕にも紙粘土を貼り付け、たくましい腕を表現しました。貼った紙粘土が乾いたら、やすりがけをして滑らかな肌にしました。

胴体は、マネキンに液状の発砲ウレタンをスプレーして固まるのを待ち、成型しました。なかなか理想のおなかにならず、えべっさんのふくよかな体を表現するのに苦労しました。



造りもの展

(令和七年九月二十日～十月十九日)



鯛は発砲スチロールを切り出し、新聞紙を貼り、紙粘土を貼り付けて形を作りました。鯛の目とうろこは会員のみなさんでどういった形にするか相談してシールを何度も付け替えて決定しました。

台車はアルミのリヤカーを利用しています。木材でえべっさんが座る台を製作しました。えべっさんが立派に見えるように高さを調整しました。台車につける幕や衣装は、使われなくなった着物を再利用。それぞれのパーツを組み合わせて台に固定、ついに見る人を元気にする良い笑顔のえべっさんが完成しました。



九月二十日から十月十九日の間、総社御門にて一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会の活動を伝えるため「伝統を再現する造りもの展」を開催しました。

メイン展示として今年度製作のえべっさんの造り物を会場入り口に設置。えべっさんの笑顔で来場者をお出迎え。一緒に写真を撮られる方も多数見受けられました。

にわか・武者なりきり体験の日はとても多くの方にご参加いただき、衣装を着る順番待ちが。保存会で手作りした衣装を楽しめました。

期間中、約三百名のご来場がありました。外国の方にも会員さんが展示を案内し、楽しんでいただき、国内外の方々に保存会の活動をより広く知ってもらうことができました。



小袖山に飾る小袖の陰干し

(令和七年十月二日)



まだ暑さ残る中、境内に広げたシートの上に色とりどりの小袖を並べていきました。本年は物干し竿を改良し、干す作業がより簡単にできるようになりました。

保存会会長をはじめ、会員二〇名程のご奉仕をいただき、小袖山に飾る小袖を約二〇〇領陰干しすることができました。

て、皆様からのご寄進をお待ち申し上げております。

受付場所 播磨国総社社務所

姫路城下にくりだす謡囃子^{うたいばやし}

(令和八年一月十四日)



本年度で八回目となる謡囃子。総社から飛び出しにぎやかな行列で姫路城下を練り歩きます。

春を思わせるような暖かな陽射しに包まれて姫路城下にくりだした総勢一三〇名余りの謡囃子行列。色とりどりの衣装や曳き物のインパクトが沿道の注目を集め、地元の方や観光客の方々から声援をいただきました。今回、初登場

した令和七年度づくりものの製作会で会員有志の手作りで作製した『えべっさん』は、無事に総社までの帰ることができると注目が集まる中、鎧武者と大傘にガードをされながら総社を発しました。

「ヨイヨイヨイミツヤマト」

と三ツ山音頭が流れる中、姫路駅付近の商店街を西へ西へと進み、それから西二階町を今度は東へ東へと、そして、





姫路城を背にして姫路駅前広場へと一筆書きで描くように総社を出発してから約一時間三十分後に姫路駅前へ到着しました。到着すると、次代を担う園児たちがワクワク&ソワソワしながらお待ちかねでした。



ひかり保育園の園児たちと三ツ山踊り保存会で、三ツ山踊りを披露。法被ハチマキ姿で一生懸命踊る園児たちをあたかな陽射しが照らしていました。次に姫路・城東連の登場です。鉦や太鼓の音が響き渡りました。謡囃子の華やかで賑やかな雰囲気観客の方々や、駅前を通る方々にも改めて伝わったのではないのでしょうか。

その後の行列には、園児たちも合流し、より賑々しく総社へと練り歩きました。

その姿を「えべっさん」もニコニコ見守っているようでした。本年も無事に謡囃子を実施することが出来ました。最後になりましたが、謡囃子に向けてご協力いただきました氏子・会員の方々、置塩城鋳工房の方々、しんきひかり保育園の方々、崇敬者・関係各位に心により感謝を申し上げます。

令和八年度 保存会事業予定

- 一、調査・研究事業 会報誌第十一号発行
- 二、研修会・講演会事業 講演会

- 三、会議 役員会

- 四、その他関連事業行事等
 - 小袖の陰干し
 - つくりもの展
 - 謡囃子の実施
 - 新規入会促進

「悠久の歴史を伝える 播磨国総社一ツ山大祭・三ツ山大祭」

好評頒布中！

一ツ山大祭・三ツ山大祭の
すべてがわかるこの一冊！
一冊三〇〇円 播磨国総社にて



第 23 回
播磨国総社三ツ山大祭
令和 15 年 4 月斎行予定



発 行 令和8年3月31日

発行所 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会
姫路市総社本町190 播磨国総社射楯兵主神社内

☎079-224-1111 fax 079-224-1114

【E-mail】hozonkai@sohsha.jp 【HP】<https://www.sohsha.jp/>

